はざ干しと伝統の継承
―松木さんの思い―

松木　義明

聞き手・赤坂愛海　村上日向（石川県立穴水高等学校１年）

自己紹介

私は松木義明です。昭和 18 年９月５日生まれですので、今年で 71 歳になりました。家族構成は４人です。自分とばあちゃんと子ども２人。まぁ、子どもっちゃぁおかしいけど跡取りが２人。孫はみんな大学生でおらんげん。生まれは下唐川です。中学を卒業して東京の方へ出て、就職しました。東京から下唐川に戻ったきっかけは両親が年をとったからです。昭和 50 年くらいに戻ってきて、そっから３年後の昭和 53 年に松木工業（土木）を開業したんです。そんで、稲作もはじめました。

稲作について

下唐川の田んぼの広さは 29 町歩（ちょうぶ）、約 30 ヘクタールです。稲作の工程は、まず苗は芽出ししたやつを農協さんから買っとるげんわ。昔は種もみからやっとったげんけど。古代米を作っとる人らちは今でも自分でもみまいて芽出ししとるけど、それ以外はほとんど全部買っとるわ。田を作る時期は、だいたい４月からやね。普通は自分の田んぼは自分でやっとるんですけど、下唐川は 20 年ほど前に「農業法人穴水あぐり」っちゅうグループを６人でつくって、グループでやってます。この辺でグループをつくってやったんは下唐川が１番最初やと思う。

苗を植えたあとに除草剤っちゅう草の薬をまくんですよ。田んぼでも畑でも雑草が生えてくるでしょ。まぁ、昔は生えてきたのを手でとってたんですけど、そうゆうことは今の規模じゃできないんですよね。だからまぁ、雑草を抑制する薬ちゅうことやね。そんで稲がでっかくなってきたら今度は、農薬を撒きます。さっきの除草剤が草の薬やから、農薬はまぁ虫のやね。消毒せないかんのや。はやい話が害虫やわね。農薬もね、10 年ほど前までは、ホースみたいな長いひも持って自分で撒いたんよ。現在でもやっとるところはいっ

小学校５年生の稲作体験学習

ぱいあるよ。田んぼのほうから煙みたいなんがたっとる時はそれやっとりん。粉で。下唐川の場合は２メートルちょっとぐらいあるラジコンみたいなヘリコプターで農薬散布をやっとりんけど、一台７万円ぐらいすりんわ。

あとは、はざ干しをやってから、脱穀っちゅうてもみと藁とを分けます。そんで出たもみを、もみ摺りでもみがらと玄米とに分けりん。次に、精米機にかけて玄米を白米にする。そうしてはじめて食えるようになるんですわ。まぁ、今ではコンバインっちゅう機械でやるから刈るとすぐにもみになってしまうんやけどな。稲作の工程っちゅうのはこんなもんです。

あとは、田んぼに使う水やな。下唐川は丸山っちゅう山の一番上流の方から、用水っちゅうて、水を流すところをずっとつくってあるんですよ。その山から流れとる水の途中に、上流側から「小滝」と「大滝」っちゅう滝があって。なんも害のないところからきとる水やからきれいな水やわね。その水を使って田んぼをつくっています。

米のうまいのは水と光の当たりによってなんや。だから、田んぼが山の中にあったりすると陰になってうまくないものもある。下唐川の水はきれいやし、光もまぁまぁとれるということで、下唐川の米はうまいっちゅういい伝えがあるのや。昼と夜での温度差もあるしね。夜のほうが寒いんや。

今と昔では稲作のやり方はほとんど変わってますね。たとえば、私が子どものころは、今やったらトラクター使って耕すところを手でうったげん。田んぼを全部クワで。金のあるやつは牛買うてやっとたけど。まぁ、牛を使って耕しても、今トラクターで10枚できるとこ、牛なら１枚もできんわいね。馬ならまだ速かったけどもなぁ。でも最初のころはまだトラクターなんて高級なものは買えんで、耕耘機で田んぼを耕したね。今でもたまにやっとる人はおるけど、ほとんどトラクターや。耕耘機で田んぼ耕すのはかなり重たいし、時間もかかるしね。

はざ干しについて

まず、はざ干しのやり方ねんけど、杭をたててはざ（稲架）おこして、稲の刈ったやつを横に掛けるんや。手で。うちは６段ねんけど、６段分をしばって掛けたやつを、田んぼの近くにはざたてる場所つくってかけとるんやわ。ふつうは田んぼに３段か４段かけるやつがありんけどね。そんで、はざ干しは天日干しともいうけど、はざ干しするのとせんの

小学生にはざ干しを教える松木さん

小学校５年生のはざ干し体験の様子

とじゃぁ、おいしさが全然違いますね。乾燥機なんかと比べりゃ全然違うわ。でも最近はそんなたいそうなことする人はおらんがになってしまって。乾燥機は早いから。あとはスズメとかハトにちょっと食べられるくらいで、はざを干しといてもあんまり被害はない。干しとるときに一番困るんは、雨が降ったときやなぁ。雨がどんどん降ると、乾燥せんでダメになる。ダメになるっちゃぁおかしいけど、倍ひまがかかる。はざ干しはものすごく手間がかかるもんやからなぁ。まず稲刈りをして、その刈ったやつをいくつかの束にしばってから、はざまで持ってかないかんのよ。そんで稲の束を分けて、はざにずぅーっとかけていくわけ。１日でやると、日中に刈りたおして夕方までにはざんとこに持ってきて端からかける。すごく手間がかかるから、雨が降られると一番困るんや。

継承していくために穴水小学校の５年生に体験学習をしとるんですわ。なんで５年生かっていうと、たまたまこの近くに女の子が住んどって、その女の子にやってみたらどうかっちゅうて話しかけたらその小学校の校長先生が、ほんならぜひやりましょうということで始まって、その女の子が５年生やったから、おのずと５年生になったっちゅうことや。だから、その子たちのためにも稲作ではざ干しまでやっとるわけですわ。

だごだい祭りについて

「だごだい祭り」っちゅうんは、その昔、京都に働きに出た次郎太っちゅう村人が神様の宿る石を持ち帰ったけどご馳走がなくて、質素な料理でもてなしたのが由来とされているお祭りです。「だごだい」は団子のこと。今は味つけすっけどね、昔は砂糖が入らんただの団子を作って小豆をまぶすんや。もち米を粉にして水に入れて練る。それを１つずつにして小豆まぶしたようなやつです。各家庭で自分らの食べる分は自分らのところでやりますね。あとはお膳ですね。中身はハコベとかセリとか野菜のようなものばっかりですね。まぁ、だごだい祭りっちゅうのは貧乏な神様の祭りやからね。継承していきたい理由は、昔からの下唐川の由来の伝統行事ですからね。続けなきゃいかんなと。集落として守っていかなということですね。

ばんもちについて

ばんもち大会っちゅうのを毎年やっとるげんわ。その大会では米俵を持ち上げるんです。そんで、一番重たいのを持ち

（上）ばんもち　子どもの部　　（下）ばんもち　大人の部

上げた人が優勝ということです。毎年子どもの部と大人の部に分けて、優勝と準優勝と３位を決めています。子どもと大人の部が全部終わったら、みんなでごはんを食べる。やっぱり伝統行事ですからね。できるだけ続けていきたいですね。

【取材日：2015 年８月７日・10 月 17 日】

PROFILE

松木　義明 まつき　よしあき

昭和 18 年９月５日・72 歳
下唐川地区長

これまで松木工業で土木をする傍ら農業（稲作）に 37 年間従事してきた。稲作においてはざ干しを行っているが現在下唐川地区では松木氏しか行っていない。加えて地域のお祭りである「だごだい祭り」の継続のために、地元の小学生を対象とした体験学習を行っている。また、地域の民話、伝説、民謡を調査し、後世に残すために「民話集　からこ」を編集した。

● 取材を終えての感想 ●

この聞き書き研修を終えて、まず最初に思ったことは、レポートをまとめることは大変だなぁということです。文章を最初からつくらなきゃいけないので、レポートのかきかたを習ったり、インタビューをしたり、インタビューしたことをかきおこしたり、タイトルから考えてまとめたり、することの全部がもう大変でした。だけど、インタビューをすることで普段だったら自分があまり気にしないようなことが、細かく聞いてみると、意外と楽しかったりするので、こういうような経験はなかなかできないことなので、すごく大切だなぁと思いました。松木さんにインタビューをしていて、いっつもふつうに食べているごはんが、こんなに手間がかかって、心がこもってできているんだなぁと思いました。そのことを忘れないようにしていきたいです。あと、伝統行事の話では、わたしはあまり伝統行事には興味がない人だったけど、伝統行事は昔から伝わってきている大切な行事なので、できるだけ続けていきたいなぁと思いました。（村上日向）

私は、初めて「聞き書き」研修に参加して、いろいろなことを学び体験しました。名人に取材をしてみてわかったことは、人の話を聞きながら文章にまとめるのは難しいということです。初めて名人に取材したとき、あらかじめ聞くことは決まっていたので大丈夫だろうと思っていたけど、聞いていくうちにまとめが追いつかなかったり聞くことが増えていったりとあたふたしてしまいました。その後の写真の構成や文集のまとめにもたくさん時間がかかったし終わるのかなぁというぐらいでした。でもなんとか読者の読みやすいようにまとめることができました。取材も２回、３回とするたびになれていき楽しく会話を交えながら質問をできるようにもなりました。それから名人の松木さんや下唐川の人たちにお会いできて、ほんとによかったです。松木さんたちの米作りに対する思いや、はざ干しやばんもちなどの伝統に対する思いを身近に感じ取ることができたからです。だからこそ、この伝統をいまの私たちが未来につながるように伝えていきたいです。（赤坂愛海）